

光明寺だより

第100号

浄土真宗本願寺派

光明寺

〒793-0030 西条市大町550

TEL 0897-53-4583



心に残る詩

私

神戸 足達三好 69



一日たりとも
 空白のない
 地球の歴史
 四十六億年の歴史
 その歴史づくりを
 知らず知らずに
 担っている
 無名の一人
 それが私です

産経新聞「朝の詩」より



彼岸会法座

3月22日(金)

★おつとめ 1時半

★おはなし 2時

【講師】 大阪教区・法栄寺

小林顯英先生

アジアの星 春山満



毎年その一年を表す漢字が公募で選ばれますが、昨年は「災」でした。また、安倍首相は内政外交ともに転機にあるということから「転」という字を選ばれました。

この二字を組み合わせると、「災いを転じて福となす」という故事成語になります。今年はこの一年になって欲しいものです。ところで、この「転ずる」ということですが、故事成語になつていているように昔から、生きる知恵として尊ばれていたことがよく分かります。

特に浄土真宗は「えんゆうしとく円融至徳の嘉号かじこう」（南無阿弥陀仏）は悪を転じて徳となす正智しょうちと言われているように、苦惱（悪）を転じて喜び（徳）とする、そんな智慧を説く宗教であります。

いかなる困難な問題に直面しても、決してそこから逃げるのではなく、こうなったのはこうなる一大道理（因果の道理）がはたらいていたからだとして受け止め、むしろそれを自らを成長せしめる大事なご縁（縁起

の道理）として頂いていく（転じていく）ことを教えるのです。問題がなくなるのはありません。なくならない問題が一つ一つ解けていくのです。その解く力が智慧（転ずる智慧）なのです。

ここに『僕にできないこと・僕にしかできないこと』という一冊の書物があります。これは、進行性筋ジストロフィーという難病に冒されながら、強靱な精神と優れた智慧（転ずる智慧）によって自らの人生を切り開いていかれた春山満さんという方の半生を綴った自伝書です。本書を通してご紹介します。

春山さんは、1959年（昭和29年）兵庫県で生を享け、父親の経営していた不動産会社の倒産を機に、「ご自身も同じ道に進まれ、大阪で不動産業を続けておられました。

ところが、24歳の頃、身体に異変が起きます。しばらくは気にも留めていなかったのですが、日を追うごとに身体の筋力が落ち、ついには走ることもすら容易でなくなつた春山さんは、やっとのこと病院の診察を受けるのです。

診断の結果、「進行性筋ジストロフィー」と判明しました。担当の医師は 春山さんにこう告げるのです。

「春山さん、この病気は筋肉の細胞膜を徐々に破壊していくもので、残念ながら今

のところ治療法はありません。心臓が停止しない限り細胞膜破壊は続きます。まもなく車椅子になると思いますが、そのうち、首から下の運動機能がすべて失われ、食事もトイレも寝返りも打てなくなりそうです。今、春山さんにアドバイスできることは、今日出来たことを明日も続けて下さい、ということしかありません」

これを聞いた春山さんはショックを通り越して頭が真っ白になつたと言います。まさに死の宣告です。しかし、春山さんはそんな絶望の淵から立ち上がっていくのです。「失くしたものを勘定するのではなく、残っている機能を120%活かせばいいんだ。知恵を出して工夫すればきっと生き残れるし、社会参加も出来、経済的にも自立できる。」と考えたのです。

失くしたものを嘆くのではなく、残されたものを活かしていく。そんな前向きな生き方が、やがて福祉介護ビジネスで大成功を収め、平成15年には、米誌ビジネスウィークで、アジア各界の代表的な指導者「アジアの星」の一人に選ばれるまでになります。

春山さんは、本書の中で次のように語っています。

「気がつくつと、首から下の機能がすべて失われ、自分では寝返りを打てなくなつてい

ました。今では、首までぐらぐらするようになっていきます。首がぐらぐらすること、病気がいよいよ僕にとって最後の砦である頭まで進行してきたということです。しかし、僕はそれを『えらいこっちゃ』とは思いません。『そんなら、次はヘッドレスト付きの枕にしたらいいな』と考えるのです。僕はこれまですつとそういうふうにして、自分が機能を失くせば失くすほど、なんとかしてそれに対応する方法を見つけてきたのです。

僕は悲観したり、後ろ向きに考えたりはしませんでした。常に自分が置かれた状況を素直に受け入れ、それで精一杯生きるためにどうすればいいかと考えてきたのです。

世の中には自分の置かれた状況に不満や文句ばかりいう人が実に多いのです。

機能を失った自分を不幸になったと見るのではなく、『たとえ足は失われても、まだ手がありますよ』とにこやかに笑えるような人になって欲しいと思います。そうすればきつと、そこにチャンスが訪れます。」

進行する自らの病さえもビジネスチャンスにしていって、その前向きな逞しい生き方には、ただただ頭が下がります。

さらに春山さんはこうも語っています。「難病になって以来、僕の身体の筋肉は毎日毎日崩壊し続けています。手足の末端からはじまった『筋萎縮』は、やがて肺と心

臓にまで及んでくるのはそう遠い日のことではないでしょう。肺が収縮を止め、心臓が鼓動を止める。その日が来るのを受け止める覚悟は出来ています。とはいっても、それは僕だけが例外だということではありません。

考えてみると、健康な人でも実は毎日、筋肉は崩壊へと向かっているのです。それが50年、60年というワイドレンジなのか、僕のように10年というショートレンジなのか、という差があるだけなのです。

僕は『人生というのは、本当に捨てたもんじゃないよ』と伝えたいと思っています。そして、その原点にあるものは、当たり前前の幸せのありがたさ、今日一日のありがたさなのです。僕が今日もこうしていられるのは、みんなに生かされているからです。人間は決して一人で生きることには出来ません。大きな連鎖の中で、夫々に何かの役割を持って生きています。むろん、自分一人だけが成長しているわけではありません。みんなが成長しあっているのです。

そういう中で今日一日、そして明日という日を考えながら、今晚も眠れる幸せ、僕はそういう当たり前の幸せのありがたさに、みんながもう一度目覚めてくれることを切に願わずにいられません。そこに気づけば、誰もがもつと強くなれると僕は確信しているのです。」

春山さんのこの言葉には、もはや解説は要りません。

生かされている「いのち」に感謝しながら、与えられたかけがえのない一日一日を精一杯生き抜いていく。そうして、いかなる苦難に出遭っても、決してあきらめず、そこに希望の光を見出していく。その生き方は「円融至徳の嘉号（南無阿弥陀仏）は悪を転じて徳となす正智」と説くお念仏の教えに通じるものがあります。このような智慧ある方を仏教では菩薩と言います。

春山さんは平成26年2月23日、多くの方に惜しまれながら、60年の生涯に幕を閉じ、お浄土へ還られました。





別離の年の出来事 2019年(平成31年)年回表

身近な人を亡くされた年には、どんな出来事があったでしょうか？改めて振り返ってみましょう。亡くなってから1年目の法事は1周忌、2年目は3回忌、6年目は7回忌、12年目は13回忌となっていくます。お法事は亡き人を偲びつつ、この私が仏縁に遭わせて頂くための大切な仏事です。

1周忌 平成30年 (2018)	「米朝首脳初会談」 2月平昌オリンピック開催。 6月サッカーW杯ロシア大会開催。 7月西日本豪雨発生。 9月北海道地震発生。10月本庶佑教授ノーベル医学生理学賞受賞 11月日産自動車・ゴーン会長、逮捕
3回忌 平成29年 (2017)	「北朝鮮、核ミサイル実験繰り返す」 1月ドナルド・トランプ氏米国大統領就任 5月獣医学部新設問題。 6月今上天皇退位特例法。テロ等準備罪法案成立。 7月北朝鮮ICBM発射日本上空通過。 10月衆議院選挙自民党圧勝。
7回忌 平成25年 (2013)	「富士山世界文化遺産に登録」 1月大阪桜宮高校で体罰による自殺発覚。 2月元横綱大鵬死去、国民栄誉賞受賞。 5月長嶋茂雄、松井秀樹国民栄誉賞受賞。9月2020年夏期オリンピック東京に決定。
13回忌 平成19年 (2007)	「郵政民営化」 2月納付者を確認できない年金給付記録が5千万件あることが発覚。 8月作詞家阿久悠死亡。 9月安倍首相辞任 福田康夫内閣発足。 10月日本郵政公社が民営化。
17回忌 平成15年 (2003)	「自治体平成の大合併」 3月ロス疑惑三浦和義無罪確定 5月白装束軍団各地で謎の運動 8月火星と地球6万年ぶりに大接近 9月ベネチア映画祭で北野武「監督賞」を受賞。
25回忌 平成7年 (1995)	「阪神・淡路大震災」 1月17日未明阪神・淡路大震災発生。 3月地下鉄サリン事件発生。4月学校週五日制始まる。 6月オウム真理教麻原彰晃逮捕。 12月巨高速増殖原子炉「もんじゅ」のナトリウム漏洩事故。
33回忌 昭和62年 (1987)	「石原裕次郎死去」 4月国鉄民営化。JRグループ7発足 7月石原裕次郎死去。 10月利根川進ノーベル医学生理学賞受賞。ニューヨーク株式市場大暴落(ブラックマンデー)。世界同時株安。 11月「竹下内閣発足。
50回忌 昭和45年 (1969)	「大阪万博開幕」 3月日航機よど号ハイジャック事件。 4月ビートルズ解散 5月 瀬戸内シージャック事件発生。 8月銀座などで歩行者天国実施。 11月三島由紀夫、市ヶ谷の自衛隊東部方面総監部にて割腹自決。

「報恩講」勤まる！



昨年12月6日(木)、西条組長・高橋恭敬師(心光寺住職)をお招きして「報恩講」を勤修しました。

【講演主旨】

親鸞聖人が生涯かけて求められたのは「生死^い出づべき道」(迷い^{げだつ}を解脱する道)でした。29歳の時、法然上人のお導きにより阿弥陀さまのご本願のハタラキ・・・念仏一つで救われるというみ教えに出遭われた聖人は、^{じらい}爾来その教えを支えに90年の生涯を生き抜かれました。阿弥陀さまのお救いは、「ひとたび捕りて永く捨てぬなり」と聖人が仰せられたように、ひと度お念仏申す身になれば、永遠にその救いから漏れることはありません。ですからお念仏申すことが大事なのです。そうすれば、どんな死に方をしようとも、またどんな生き方をしようとも、必ずお浄土に生まれさせて頂けるのです。私たちはそんな尊い教えに出遭えたことを深く喜びと共に、その喜びを次の世代に伝えていく努力を惜しまないようにしたいものです。そこに報恩講を営む意義があるのです。本年の法座皆勤者は次の9名の方々でした。越智敏子・永井初江・野間和幸・松本朱美・真鍋磨千子・森延子・安永省一・安永敏枝・山路シズエ(敬称略)

「新春法座」開催！



今年一番の寒さになった1月9日、藤田徹文先生(備後教区・光徳寺)をお招きして新春法座を開催致しました。

【講演主旨】

仏教では昔より「心身」と書かず、「身心」と書きます。これは、「身」があるから「心」があるという考えから来ています。そこで、この身は何故あるのかということですが、難しいことではありません。この私に両親がいたからです。その両親にはまた両親がいたわけですから。つまり時間的に見れば、無限の過去から、数えることの出来ないいのち(無量壽)のご縁(ハタラキ)を頂いてこの身があるのです。さらに、空間的に見れば、この身は数知れぬ多くの方々の支えを頂いています。それだけではなく天地一切の支えを頂いています。こうしてみますと、この身は、時間、空間無限の広がりを持ったこの世界のありとあらゆるもの(無量)が一つに(一如)につながり、大きな「ハタラキ」となって、包み生かして下さっているのです。これが、この身を含め、すべての「いのち」の存在を実現して下さる「法則」(ハタラキ)です。無量なるものをインドの古語でアミダと言います。この法則(法)を人格的に味わう時、^{ほっしん}法身といい浄土真宗では阿弥陀如来と申し上げ、私たちの目覚めを促して下さるハタラキ(大行)といただいてきたのです。それを姿形に表わしているものがご本尊です。ご本尊は「目覚めよ」と呼ぶ阿弥陀のハタラキを形にしたものです。

趣味の広場



俳句を楽しむ(七十九)

森本隆を

平成最後のお正月、皆様にはいかががお過ごしだったでしょうか。まず、無事に新年を迎えることが出来たことに感謝し、昨年各地であった豪雨など自然の災害で今なお被害に苦しむ方々への思いを忘れぬように日々を過ごしたいものです。自然に親しみ、山川草木に力を頂きながら俳句を楽しむ者にとって、自然の暴威という面を常に意識していなければならぬと自戒しています。しかし私達は自然の大きな力によって生かされている訳で、命の源は全て自然から頂きますね。私たちが日々無事息災に生きる基本は自然から恵まれる食にあります。今年、大自然への感謝ということを背景に、季節ごとの食材や日々の料理など、食にちなんだ俳句を見ていきたいと思えます。今回はまず冬の句ですね。

寒卵一ついただき一日生く 大橋麻沙子
水を飲むやうに蜜柑を食べる鳥 木原苑生
共に剥きて母の蜜柑の方が甘し 鈴木榮子
とても身近な食材でなじみ深い「卵」と「蜜柑」の句です。でもよく読むと、ありふれた食べ物を通して、自分たちの命や健康のもととなる物

への感謝の気持ちがよく解ります。ずっと値段も大して上がらず、しかも栄養的にも優等生と言われるタマゴ、ミカンへの讃歌のよう句ですね。

大鮪ひと蹴りで糶り落としたり 千田一路
待たされてゐる満席の河豚の店 津高里永子

牡蠣食べてわが世の残り時間かな 草間時彦

今年の正月そうそう、東京築地から豊洲へ大騒ぎして移転した魚市場の初セリで、青森県大間産の鮪一本が3億3千万円以上の値がついたと話題になりました。ご祝儀相場とはいえ、私などは、日本には自分とは関係のない全く別の世界があるんだ、とかえって話の大きさを楽しんだりしたものです。さてこの三句、「鮪」、「河豚」、「牡蠣」とやや高価な食材の感じもしますが、どれも昔から日本人にはとても好まれた冬の食べ物です。それだけに、たまの贅沢もまあいいか、といった感じがただようのが2句め3句めの「ふぐ」と「かき」の句です。並んで待たされても食べたい、こんなうまいものをあと何回食えるかなあ、などと、ややしみじみとした感じもする句です。

大根のみずみずしきは折れやすし 成井侃
遠山に雪きてをりぬ赤かぶら 村上 易子
休肝日京人參の紅きかな 草間 時彦
なくてはならぬ冬野菜の句。大根を手にした時の、どっしりとした重みの中にあるみずみずしい感じ、広い畑の向こうの方に雪をか

ぶった山が見え畑のかぶらの紅い色の鮮やかさ、酒を休んで食卓に向かうと煮物の京人參がひときわ紅色で美味しそうな感じ。自然の恵みへの尊敬すら感じる3句でした。

熱燗の酔が言はせし恋のこと 岐 志津子
湯豆腐の踊り舞台の敷昆布 工藤 節朗
寄鍋や思わぬ人の渋い歌 長崎 布紗
おでん煮てその他の家事何もせず 山崎 房子

1句めと4句め、いかにも女性らしい句。つい昔の事を口にする、家事からの解放感、ともにいいですね。さて、2句めと3句めは特に世の酒を愛するお父さん方におすすめの句ですね。食べて呑んでそれでよし、で止めて寝るのではなく、おいしい料理やその時の雰囲気、気分をまとめて文字で書いたら俳句が出来る、と思いませんか。今年あたりは、手に紙とペンを持って、という気分になりませんか。以上、冬の食べ物、の句、『角川 俳句大歳時記』から拾い出してみました。今年もよろしくお願ひします。



位職書作品



【字句】
龍樹顯中道

【意味】
龍樹菩薩は中道という教義を顕された（確立された）

BOOK 本

『僕にできないこと。僕にしかできないこと』



春山満 著
冬山満 著
幻春山 著
1400円 + 税

本書は今回、「一口法話」で紹介しました春山満（1954～2014）さんの自伝書です。

氏は24歳で進行性筋ジストロフィーという難病に侵されながらも、強靱な精神力で介護機器を次々開発し、大手医療法人の総合経営企画なども手掛けるなど、医療介護ビジネスの第一人者として活躍されました。

本書は次のような構成になっています。

- 第一章 フェアに爽やかに生きたい
- 第二章 死ぬ気になれば何でもできる
- 第三章 あたり前の幸せのありがたさ
- 第四章 春山ビジネスの成功の秘密
- 第五章 介護も老いも自己責任の時代

読む人に深い感動と勇気を与えてくれる書です。現在、絶版ですが、中古本でネット販売されています。

おねはん 涅槃会

3月15日(金)

- 第1回目 9時～10時
- 第2回目 11時～12時
- 第3回目 1時～2時

該当のお家にはご案内を
差し上げています

光明寺のホームページ

南岳山光明寺

検索



言葉のプレゼント

今日という日は二度と来ない
二度と来ない今日が毎日来る
そしていつか最後の今日が来る



★次回発行予定…7月中旬

「光明寺だより」をご家族の皆さんで
お読みください



除夜の鐘風景



冊子『えひめ東予散策』
光明寺が表紙を飾っています

★12月6日(木) 西条組長高橋恭敬師をお招きして報恩講を開催しました。

★1月9日(木) 元・本願寺伝道院部長・藤田徹文先生をお招きして恒例の新春特別法座を開催いたしました。厳しい寒さの中、20名の参拝者がありました。

★関連記事5ページ

★本紙は平成10年4月発刊以来、今回で百号を迎えました。これからも皆さんのお役に立つような紙面づくりを心掛けていきたいと思っています。宜しくお願いいたします。

★除夜の鐘には多くの参拝者がありました。

★上図参照

★県と東予地区の市町村で構成されている団体「東予歴史文化資源活用連携協議会」より発行された小冊子『えひめ東予散策』に光明寺のことが紹介されました。

★上図参照

